北國紀行（四）

丹波浪人

和倉溫泉の朝景色も亦味ふに可いと聞かされて、朝食前に散歩したが夫れ程でもなかつた、矢張り筆者は能登島を眺める夕景色が北陸情緒を漂はせてゐて氣に入つた、大正時代に有閑マダムとして鐵道房總線で名を賣つた△△鎌子孃が、此處で相手の男と旅館を經營してゐると教えられ、夫れらしい家を搜すのであつたが、遂に發見することが出來なかつた、そこで彼の身の上を推察して想像を逞くするのであつた、形式的な家庭生活を營むで居るよりは、詰らぬお客に頭を下げることはあつても、矢張り意義ある家庭を構成することが、彼女にとつては何よりの幸福であるかも知れないと思ふと、ここになるまでの彼女の行動を餘り責めたくも無いやうな氣がした。

汽車に遲れても構はなければ其の旅館の前を通りましやうか、汽車時間はまだ大丈夫だ、表を通るだけで可いから曲れと言つて旅館の表口だけを拜見したが、餘り立派なものではない二流組ぢやと思つたが、夫れで一層筆者の好奇心を唆つて、一度彼女に會つて近頃の感想を叩きかつたが、汽車の時間が夫れを許さない、併し停車場に馳け附けて見ると、汽車は遠慮なしに出發した後であつた、サーこう爲つては一日の行程に影響すると、七尾まで汽車を追かけるのであつたが、路面が悪い上に御叮寧にもボロ自動車ときてゐるので、追越すことの出來ないのは當然であつた、お蔭で縣廳の連中の乘つてゐた自動車は側溝に墜落して、氣の毒に思はれたが、夫れに至らしめたのは荷車挽の勢であ

るのに、矢張り酒手を呉れなければ引き上げに助勢しないと言ふのだから始末が悪い、又候昨日通つた二十里の道を四時間もかゝつて走らなければならぬことゝ爲つたが、鎌子夫人のお蔭と思つて辛棒する。

いつしか津幡に出たが、此處から先は國道だ、省線鐵道に竝行してゐるが假令短距離運送であつても自動車に依るのが不得策である調子の道路だ、だから縣廳發行の管内圖でさえ、國有鐵道や地方鐵道を太線で示してゐるが國道や府縣道は、何處に示されてゐるか判らない程の細線で示してゐる、縣廳の連中が斯樣な頭だから道路に熱のないのも當然だ。夫れでも津幡町からの道路は田圃の中に在るので急勾配はないが幅が狹い夫れに路面は砂利式で維持が尠しも考察されてゐない、金澤に近い小坂の附近まで來ると、内務省が直轄の下に改良してゐる、聞けば八年度の事業として下大樋町山ノ上三丁目間、千百六十米の區間を幅員十五米に改良するのださうだ、工事費は僅に二十萬圓だのに八年度の仕事を今頃にやつてゐる、近年になかつた大雪の爲に豫定の通り工程が進まなかつたのだと聞かされたが、北陸に雪の多いことは開闢以來の天則だと心得てゐるのに、今頃夫れに理由附けるのも變だと思つたが、憎まれ口を叩かない方が可いと心得て成る程と感心する。

○

縣廳に館哲二長官を訪れて、前任地の鳥取とは違ふであろう感想を聞かして貰ひたいと思つても見たが、赴任以來餘り永くもないのに徹底した感想を聞かむとするのは、無理であろうと遠慮して、加賀百萬石樣の兼六公園を拜見する、六勝を兼備すると言はれた公園も、自然美を對象とした國立公園を謳歌する今日此頃では、人工的箱庭式な此の公園は早や現代的なもので無く爲つてゐて仕方がないので足を戻して縣廳を訪れる。

館知事は地方長官會議に出席の爲に東上したと聞かされ、筆者の希望は亦裏切られてしまつた、彼れ館長官は純事務官肌の男で、田舍式の政治家は彼が餘り政黨的に行動しないことを物足らないやうに囃立てる、で田舍の天狗式

な政治家の多い縣では、膽力の足らない男だと評してゐるが、地方長官が事務官である以上は夫れで十分で田舍式な政治的行動を採れと言ふのが間違つてゐる、彼は大正三年東大政治科を出てから餘り地方生活をせずに中央廳の飯を喰つてゐたことが、他の同輩と違ふやうな型に爲つてゐるようだ、佐賀の藤岡や、熊本の鈴木は同期生ではあるが、地方官生活に慣れてゐるので水鳥の羽音位は夢のをとづれ位に感じてゐるのであるが、彼れ館には夫れだけの慣れ味がない、鳥取縣時代にも政友の元老や民政の幹部が、いきり立つて双方の主張を通そうとするとき、彼は夫等の主張を眞面目なものと心得て、彼等の心裡を捉えずに善處しやうと焦慮する、夫れは彼の眞面目な純情であるが、俗惡極ることなきと言へば鳥取縣の政治家は怒るであらうが、其の程度の人間であることは請合だ、だから可い加減に遇へは可いのに夫れが出來ない生一本の男だ、實際中央生活をしてゐる官吏は　地方生活よりは暇があるので讀書もすれば勉强もする、時には天下の名士に接して意見を聞く機會もあるので、唯我獨尊的な口惚も出てくる、併し夫れが民情の實際に合はないことを知るに及んで後悔する連中が多い、館長官も矢張り其の感を深くした一人であろう、併し館長官も此縣と民情を同くする富山の產であるから、鳥取縣を治めるより餘程樂な筈である、今は彼に相應しい官僚時代だ中橋德五郎の意見に聽く必要もなければ、永井柳太郎の權勢に阿るの要は無い、思ふ存分に腕を振ふことが、生れ故鄉の隣縣長官として運命附けられた任務であらう。

内務部長は中村忠充君、館長官とは違つて永年の地方官生活を嘗めたゞけの苦勞人である、だから館長官の女房役としては申分のない男、併し長官とは一年後れの東大英法科の出であるから、自己信念を多分に持つてゐる、夫れはかりではない世が世であるならば地方長官として館長官以上に活躍する男で、いつまでも石川の片田舍に日を送る人ではない、併し何事も運命に任せて振はない我が石川縣の土木に盡して貰いたいものだ。

○

此處の政黨分野も富山の夫れと同じで、中央政界では、政友四、民政二の割合で代議士を送つてゐるが、縣會は夫れと反對に民政十九、政友十一の割合で民政が優勢を持する、矢張り是も民政黨內閣時代に行はれた選擧のお蔭と言つても可い、併し縣下の政界を眺めて見ると、中橋や永井のやうに大臣の椅子に据つた連中があつたにしても、將來の大政治家として世の中から囑望される人は一人もゐない、夫れに政友民政と言つて爭つて見たところが蝸牛角上の爭だ、夫れよりは政民相携て縣治の擧るやうにするのが肝要であらう

九年度豫算に就て見ると、總歲出六百二十二萬圓であるが、土木費が最も多くて百六十六萬圓、教育費警察費勸業費と言つた順序に爲つてゐる、では土木費の內で何が一番多いかと言へば矢張り道路費の六十四萬圓を頭として、治水費の五十五萬圓、港灣費の四十八萬圓が計上されてゐる、國道府縣道の維持修繕費は一里當り三百六十圓ぢやと言つてはゐるが、指定修繕費と言ふやうなものを加算しての勘定だから、普通修繕費の方は僅少であらう、そうでなければ道路の現狀が承知しないからだ、併し私が是まで旅して來た新潟や富山も此處石川と同じことだが、道路の維持と言ふことに就ては少しも研究してゐない、其の證據には定傭修路工夫の働きがなつてゐないことで判る。

某技師が言ふことには、お隣の富山縣は樂屋根性を持つてゐるだけに算盤勘定が高い、で此河川を改修すると幾許の金が要るが、一朝出水で氾濫すれば是れだけの損があると教へてやれば、澁々ながらも負擔金を出すが、此處石川は萬事退嬰的で實害を蒙つてからでなければ河川改修の效果を知らない、子規が評したやうに「加賀樣を大家に持ちて梅の花」だもの困つたものだと言つた、笑話であるとしても一面の理由を包藏してゐる、曾て此處の長官をしてゐた長延連が、此處ではガラス張りの普通民家は滅多に見られない、金澤を衞生的にし市民を潑溂たらしむるには建築樣式から變更せしめてかゝらねばならぬ、と言つたが實際隱遁的な街だ、モー少しは眼覺めて民生の利益と爲る事業

を起さなければ、世の落伍者と爲るであらう。

○

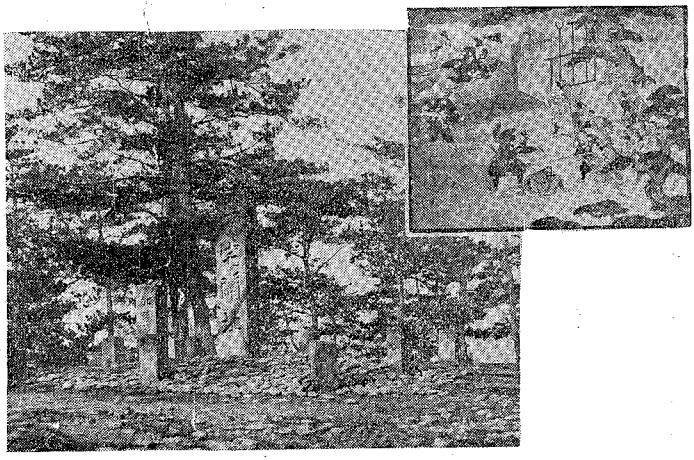
金澤市内の街路は比較的良好だ、併し夫れは維持修繕が行屆いてゐる勢ではない、地質に惠まれてゐるのと交通量が尠い勢だ、昔し市内電車の軌道敷内を鋪裝するか否かの問題が起つたとき、同じ理由で鋪裝を延期しても差支ないとされたが、當時と今とは少しも變つてゐない、惠まれた土地と言つても良からう、金澤の道路で思ひ出すことは、金澤から西へ金石町へ通ずる道路のことだ、今でこそ金石港と言つても世間の人は知らないであらう程の港灣だが、昔は偉ゐものであつた、加賀藩の海運業は我が海運史上特筆すべきものであつて、凡そ六十州の津港加賀用船の通泊せざるなし。とまで賞えられたもので、例の錢屋五兵衞が石川郡宮腰浦から飛出でゝ、著聞したのも譯がある、兎も角其の用船の碇泊は此處金石港で取扱はれたものだつた、其の港灣と城下町金澤とに交通連絡を必要とすることは今も昔も變りはない、其の連絡道路の完備を圖つたのは誰であらう、夫れは小說や戲曲乃至は講談等に傳へられてゐる加賀騷動の主人公である大槻傳藏ぢやと言はれてゐる。

彼は連絡道路の完備を策し、路線を選定するに方つて松明を點して直線式なものを選んだと言はれてゐる、今も府縣道金澤金石線が、石川縣では珍らしい程の直線式に維持されてゐるのも彼のお蔭だと敎へられて、成る程、彼は足輕の身分でありながら主家に取入つて權勢を得、夫れに乘じて主家横領の野望を遂げむとしたことは寔に惡むべきではあるにしても、連絡道路の施設を考へ之を直線式にした其の賢明さは賞えても可いであらう。

犀川に架けられた犀川橋、金澤に過ぎたものゝ一つに數へて可い位だが、國庫が架橋に補助したものぢやと聞かされ、夫れでこそと始めて肯かされる、市外に出ると幅員十九米の立派な國道が出來上つてゐる、昭和六年失業救濟事業として内務省が改良したが、同じ拵へるなら都市計畫幅員に仕上げる必要があると言ふので耕地整理組合との共同で完成せしめたと聞かされた、併し此處から野々市町に

至る間の道路は隨分屈曲が多いので、何を措いても眞先きに此間を改良せなければ既施事業の效果を擧ぐることが出來ない。

松任町から先きも國道としては不十分だが、手取川には立派な近代橋が架けられてゐる　是も矢張り國庫が補助したお蔭ぢやと言はれてゐるものゝ、架橋費五十二萬圓に對し政府は三十四萬圓の補助を渡さなければならぬのに、政府の財政困難を理由にして補助がまだ三十萬圓も殘されてゐる、此位なら最初から補助なしで起工するのが得たのに、矢張り國庫の補助あることを口實にしなければ、縣會議員が架橋案に贊成しないので、縣當局も已むなく其の手段に出た詰り政府の補助は、事業助成ではなく起工誘引の補助と言つて可い、此手に乘せられて起債の償還に惱んでゐる地方は隨分多いと聞かされたが、政府は何等かの方法に依つて其の責務を履行せねばならぬのに、地方財政調整交付金なぞの案を立てながら、補助完濟に力を注がないのは不都合だと言ふ感を深からしめた、此橋を通るのにも聊か氣兼ねする。

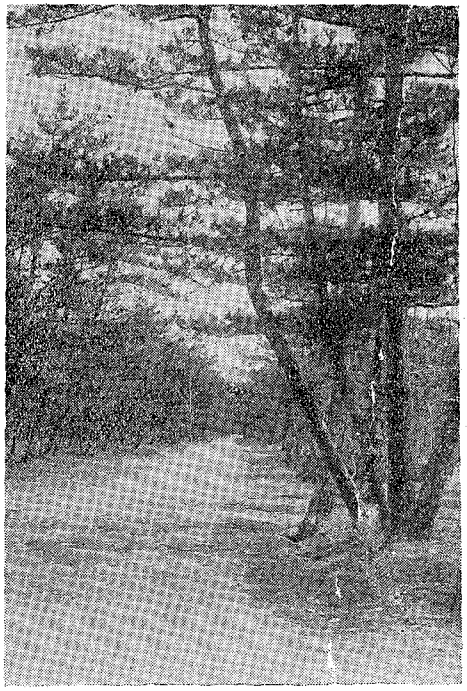


安宅關跡

小松町にまで辿りついたが、近くにある安宅の關址を捨てゝ通ることは出來ない、で夫れに足を向けるのであつた、小松と安宅、双方とも樞要地のことだから兩地を結ぶのには何れ府縣道であらうと心附かれたが、幅は九尺しかない道路で自動車の行き違ひを許さない、運轉手に聞けば道幅は狹いが線形

が可成いゝので、遠く向ふに自動車を見附けるときは互に信號して停車することにしてゐるから大丈夫だと聞かされた、詰り道路が悪いので互讓の精神を出してゐるのだと頷かされた。

安宅の關址　今も、梯川を隔てゝ關跡の碑が立てられて、昔を物語つてゐるやうだ、成る程、延喜式には北陸道の驛を示して、加賀國驛馬の内に安宅を擧げてゐるで、安宅驛のあつたことは事實だ、こゝで延喜時代の北陸道を調べて見たい氣が起つた、今私が通つて來た松任町と手取川との間に比樂島と言ふ村がある、夫れが延喜式驛の比樂驛だ、勿論手取川の爲に地形が變つてゐるに違ひないが兎も角此邊を比樂驛と見て間違はなからう、北陸道は此處から安宅を通つて、當時の潮津驛――今の鹽津に出て縣界牛ノ谷峠に出てゐたことを想像される、夫れも各驛間の距離が各三里ある事から見て確實だ、そうすれば安宅の關址も滿更嘘でもないやうだ、



木曾街道（安宅關）

三州名跡志には。古の關跡二三里海中に在りて、百年前までは松の枯木などありしと。言つてゐる日本海方面の土地が海波の爲に蠶食されるものとすれば必ずしも妄說として一概に排斥する譯には行かないであらう。併し土人は夫れを否定して、此安宅關は元、寇ヶ浦と言つて、異國人の來襲頻々であつた地だから住吉神社を勸請して、其の神威に依つて寇賊を防禦し航海の安全を祈つたものだと言つてゐる、今も住吉神社に關の遺物が保存されてゐる。

夫れは夫れとして、英雄義經が辨慶に金剛杖で散々に打擲されたのも關主富樫の虎口を逃れん爲の手段とは言へ、英雄の忍ぶべきを忍ぶ心底は勸進帳に依つて後世人を指導してゐるこそ良い物語である、神官は尙も念入に說明を聞けと言ふのであつたが、時間の都合で失敬して、更に小松町に後戻りして湖畔の道路を大聖寺町へと急ぐのであつた。

日は暮れて國道の現狀も判らない。延喜式に傳へられてゐる翊倉驛、今の三木村橘へも立寄ることが出來ないので、夜間ではあるが名高い吉崎御坊に御參りする、否な御參りよりは嫁威の肉附面を見たいばかりに北陸道を外れて吉崎の願慶寺へ着いた、蓮如上人の舊跡と聞かされたが、今日本山の(偉い坊さん)が歸られたので留守番の坊主に肉附面の由來を聞かされるのであつた。

日山の城主日山の家臣吉田某、日山城沒落後百姓と爲つて十樂村に居を構え、其の子孫與三次の代と爲つた、與三次には妻と二人の子供があつたが、與三次と子供の二人は死んでしまつた　妻は此悲しみに遭つて世の賴みなきを嘆いたが、未來はかゝる苦しみのない樣淨土に參り共に樂しみを受けむものと、蓮如上人吉崎に在るを聞いて勸化を受け其の信者と爲つた、ところが其の家の姑姥　慳貪邪見の者で嫁の吉崎へ詣るのを惡み、之を止めさゝんものと計畫した結果、或る夜祖先累代持傳へられた秘藏の面を取出し白髮のかみをおつさはき面をかぶり、身には白い帷子を着て、草茂る小谷に嫁の通るのを待つて驚かしたが、嫁は心も寂めて驚かない、飲まば飲め喰はゞ喰へ金剛の信はよもやはむまじ。と稱名をとなへて吉崎へ參つた、姑は急いで我家に歸つて面をとろうとしたが、面は顏に附いて取らむとすると顏の皮をはぐやうに痛い、悶搔いてゐる折柄嫁は吉崎から歸つて來て先程の鬼が吾が姑であつたことが判つて、嫁は姥に彌陀を賴んで念佛を勸めそれて面は直に落ちたが、此二人は無二の信者と爲つた、其の時此面は蓮如上人へ差上るに末代の見せしめよとて、當寺の開基祐念坊に授與されたのが世に名高い肉附の面で、夫れは是れだと示された、相當年所を經た面で春日作とか傳へられてゐる、何

れ佛教宣傳の手段として用ひられたのであらう、其の面と同じものが東西兩本願寺の兩末寺にあるので、本家爭をしてゐるが、宗派擴張の手段であるにしても左樣な因緣話に欺される甘い人間は尠い筈だ、併しながら此地方に於ける本願寺の勢力は、到底人の想像だにも許さない程であつて、又本願寺が夫れを利用して淨財の蒐集に商賣上手な手段を講じてゐるのも亦人をして驚かしむる。

本願寺の話に耽つてゐる間に蘆原の溫泉に着いた、此處で一夜を明かすのだが、明日の行程頗る困難だと聞かされて早く床に就く計畫であつたが、談會々鰯のことに論及し其の滋養が人間の勢力に及ぶことの偉大をK事務官は主張するのであつた、其のお蔭で鰯を注文して飲み始めるのであつた、で翌日の出發は少し辛かつた。

九頭龍川の日本海に注ぐところに在る三國港、光仁紀に子龜九年九月、送高麗使高麗朝臣殿嗣等、來着越前坂井寶三國湊。と傳へてゐるから隨分古いときからの港らしい、德川時代には福井藩と丸岡藩とが分領したそうで、餘り修

築しないで、自然の儘の港灣を使へるだけ使つたものらしい、分領の弊害を窺ふことが出來る、で漸次港勢は衰えて唯た昔の殷盛を追懷嗟嘆するだけであつたが、明治の時代に爲つて地方民は漸く眼を醒し昔の港勢に挽回するやうに努めだし、和蘭技師エセルやデレーケの指導を受けて築港計畫を樹て右岸に沈床式波止堤を拵え、十三年に開港式を擧ぐるやうに爲つた、其の後も埠頭を築造するやら鐵道三國支線が敷設せらるゝやらで近代港灣らしい型態を見るやうに爲つたが、河口港としての惱、例の土砂の堆積で計畫水深を維持するのは困難である、明治四十三年に政府の手で九頭龍川を改修して呉れたが、依然流砂を防止することが出來ないばかりか、波浪の爲に流砂を打上げて港口を維持することは困難であつた。

昭和四年度から六年度に至る繼續事業で、港內の一部を埋立て繫船岸壁やら荷揚場を拵えて一千噸級の船舶が碇泊出來るやうにしたが、相變らず港口には漂砂が堆積して船舶の出入危險であつて、荒天の日には發動機漁船の難破す

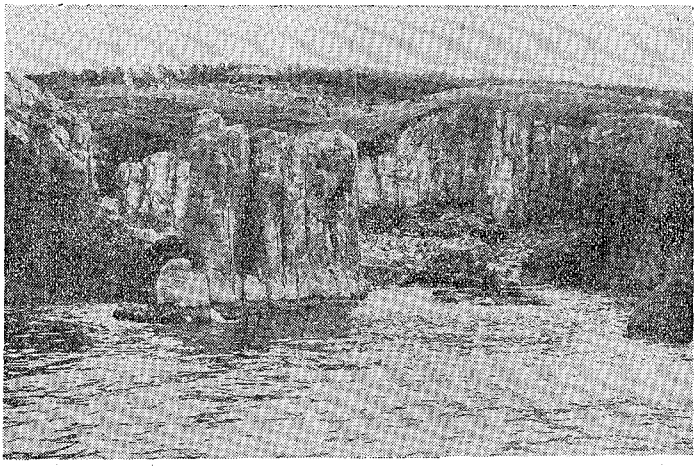
るものが尠くないと言ふ有樣、是では港灣の機能を擧ぐることが出來ないので、福井縣では昭和七年度から九年度に至る繼續事業として國庫から補助を貰つて、工費二十一萬圓で河口左岸に防砂堤を築造することにして、今は盛に仕事をしてゐる。

築港計畫は寔に結構だが、港勢を見てみると、八年度末輸出貨物七千噸、之を金額にして見ると五十二萬七千圓に過ぎない、輸入は十萬噸で百四十六萬圓、餘りにも振はない港灣だ、縣下最大の都會福井に利用せらるゝ地位を占めながら活氣が無いのは、矢張り福井が振はない勢であろうが、港灣所在地と目せらるゝ地域が、三國町と雄島村と新保村とに分れてゐて共同一致して港勢の發展を圖ろうと言ふ氣分を持つて居ないのが疵だ、夫れに福井と港灣とを連絡する設備も十分ではない、尤も鐵道の便もあるが、福井から金澤に迂回し芦原溫原を經由して三國港に達する有樣で悠長なものだ、だから九頭龍川右岸にある指定府縣道を近代的のものにすれば、距離や交通時間に於ては勿論のこと、自動車交通經濟の上から言つても申分ない程に適當だのに、と考へさせられ此道路を視たかつたが丸岡町と福井市間の道路を視察するのが筆者の用務であつたので、夫れが出來なかつた、併し近代的のものであれば縣土木課長の淺見洋君の氣性からすりや視察を强制するであろうに、引張らなかつたことから推すと、矢張り田舍道に違いは無いであろう、手を束ねて昔の港勢を物語つてゐても港勢が發展する譯でもない、地元三町村が協力して工場を誘致し後方地帶との連絡を完備することが、蓋し王朝時代の港勢を再現せしむる唯一の手段であろう。

三國港に苦言を呈して越前の名勝東尋坊を尋ねる、三國の町から東尋坊までは、福井縣には珍らしい程の道路だ、其の譯を聞くと矢張り農村匡救事業のお蔭で最近に慥らゑた道だと聞かされた、名勝巡りの道でも農救事業で自動車が通るやうに改良されたと思へば、此事業の效果も滿更ではない、併し野暮な大藏省邊りの役人に言はすと、名所巡りの道なんか不要ぢやと言ふのであるが、名所を巡るお客

の爲に地方に金が落ちることを氣附けば少しは世の中が判るであろう、夫等の連中に一と度、此處名所道路の難有味を見せてやり度い氣も起つた。

東尋坊。又の名を唐人坊とも言ふと聞かされたが、三國港へは既に王朝時代に唐人が來たのだから、其の名も單なる口碑として斥ける譯には行かないであろう。東尋坊は安島米脇の間に突出する岬だが、北は雄島と相對し風景明媚である、岬端は二町四方もあつて所謂千疊敷たが、斷岩絶壁の下に碧なす海水は濁つた空氣に日を送る人々に見せたいと言ふ感を起さしめたが、此處な風景も私の旅には餘り惠まれなかつた、夫れと言ふのも旅先きを急ぐからだ。



東尋坊

而かも急ぐのは永平寺にお詣りしたいからだ。

私の自動車は昨夜泊つた芦原溫泉を左に見て丸岡町方面へ走るのであつたが、通つてゐる道は府縣道ぢやと聞かされてゐるのに、幅員僅に一車線である、向ふから荷馬車が來れば勿論のこと自轉車がきても除行せざるを得ない、是等のことを心得過ぎてゐる土木課長の淺見さんは、見て見ない振りをしてゐる、併し荷車が態とよけないので業を煮やした縣廳の人は、下車して文句を言ふのであつたが一向に聞いても呉れない、民衆に言はしめたなら、自動車に乘つて通る位ならお互の車が通るやうな道路を築造しなさいと言つてゐるやうにも見える、夫れが實際だ、荷車と自動車とが行き交

へも出來ないやうな道路を管理しながら、己れの自動車だけを通さむとするのは無理だ、官憲に對する民衆の反感も此邊に胚胎して起るのかも判らない。

先祖代々からの宗派本山と言はれてゐる永平寺、地方の人程には信仰しないにしても兎も角本山だ、何と無く懷かし味もあるので、短かい旅の時間を利用してお詣りする氣にも爲つた、而かも襟を正してお詣りするのであつたが、總受附に行つて案内を乞ふたが、平民共には容易に拜觀出來ない難有い所だと言はぬばかりの應答に、初參の私は天下の靈場さもあることゝ指揮さるゝ儘に爲つてゐる、漸く小坊主が來て案内すると言ふ、小僧は草履ばき案内さるゝ者は素跣是も信仰の爲には已むを得ない、と腹の虫を押へて案内さるゝまゝに參觀する、此處は玲瓏閣で參拜者の宿所、此所は玲瓏閣大廣間、百數十疊敷で參拜者へ饗膳をするところ、鳳書閣、是は信徒の宿所、傘松閣乃至は傘松閣大廣間、全國末派寺院と壇信徒の接待所と說明され、大廣間の格天井は現代畫壇大家の逸品だ、と自慢そうに物語る、夫れから坊主の浴室、夫れから發電所、大庫院の冷藏倉庫にエレベータ等々と、舊式ホテルを案内されてゐるやうなものだ、唯一つ佛殿らしいものには過去迦葉佛、現在釋迦牟尼佛、未來彌勒尊佛の佛像を安置したのがあつたゞけで、總建坪三千二百坪の內信仰の中心となるのは佛殿の九十五坪であることが判つた、之で衆愚の信仰心を湧起せしめやうと言ふのであるから　世を愚弄し人を馬鹿にしてゐると言ふ反抗心も起る、實際人間と言ふものは淺ましいもので、窮して來ると自己を賴らないで他力本願となつて來て宗教を慌て信仰する、其の度が過きると盲信となつてくる、其の弱點に附け込んで來るのが坊主であつて、遂に佛陀と僧侶とを混同せしむる、此處永平寺も矢張り其の類に洩れないで、寺の經營、坊主の維持に努めてゐる。九段の靖國神社の祭例日に見る演藝物と違つたところは無い、昔は衣を着て下に鎧を附けた坊主も居た、併し夫れは利益を貪らむとする心根ではなかつた、夫れに衣に變裝して旅館を經營するのだから、小僧の案内も自然と營業的ならざるを得な

い、固より本山經營の爲には旅館營業亦恕すべしとしても、官營ホテル＝鐵道者經營ホテル以上に營利行爲をして、衆愚の淨財を狩り集めてゐることは、承陽大師の御志に悖ることであつて筆者をして不快の感を抱かしめた、小僧に本山修行の難易を問へば眼に涙して答へるのであつたが、奴隷的な修行を遂げなければ一人前の坊主になれないそうだ、君等は何故に宗教學に基礎して本山の此醜狀を改革しないのかと注意したのであつたが答へない、此處永平寺には文化的思想の皆無なのに驚き、筆者の祖先が本山として敬慕した其の淺ましさを嘆せざるを得ない、で本願寺派が地方で益發展して行くのも無理はないと肯かれる。

併し世は盲目であつて之に參拜する信者が多數であるとすれば、指定府縣道東古市から岐れて本山に達する道路は、本山の負擔に於て衆愚の爲に改良することが適當であろう。

又夫れ縣歳入の公平を期する上から言つても、坊主の旅館營業に對して課稅することが社會の正義に合致するところであろう。

不快な心持で丸岡町にまで歸つて來た、丸岡から磯部附近までの國道は、其の交通量に比較して福井縣としては相當に維持されてゐるが、磯部から福井までの間は屈曲頗る多く、近代交通の爲には改良を要求する箇所だ、と言へば淺見君は永平寺に對する不快の念から發した批評だと言つたが、實際道路は惡い、去年行はれた大演習に動機して、福井市中島村間二千五百米の間を幅員九米に、政府直轄の下に改良したが、尙夫れを續けなければ既改良の效果を擧げない譯だが、政府の豫算が夫れを容るゝかドーかゞ疑問だ。

×――――――×

×――――――×